
私と貴女っていうか貴方、のモンダイ。

onemu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と貴女ってどうか貴方、のモンダイ。

【Nコード】

N2294S

【作者名】

onemu

【あらすじ】

自他ともに認める根暗人見知り少女、有明 梅。彼女は入学した高校で地味に大人しく影薄く生きていこうと思った。思ったんだよ…。そうする準備は万端だったんだよ！なんでこーなる!？

根暗少女のハラハラ、学園コメディ。話数増やしていくことにあらずしも更新していく予定です！

第一問：高校生活をはじめなければならない。(1)

桜舞うこの季節。煌びやかな女子が花柄を身にまとい、蝶の様にヒラリと美しく蜂のようにブスツとイケメンを刺そうともがくこの季節。

春です。

私の周りにも舞っておりますよ、夢一杯膨らませて真新しいセーラー服に身を包み朗らかに笑い合う彼女達が。ああ、美しい美しい。

その中で同じ衣に身を包みながらも影を落とす芋虫は私です。どうもすみません。

芋虫は芋虫らしく踏まれないように生きるべきですね。ということと私こと有明梅はただちに巣に戻り暗く楽しく過ごしていきます。ではみなさんお元気で、さようなら …

2

「待てやコラ」
ガシッ。

ああ、現実。

「…。お願いだから逃がして……智ちゃん……」

「姉が入学式逃亡、ひいては不登校なんてことになったら俺の体面が傷つく。よって却下だ」

「体面って……」

中学生が言うセリフか。

「親父の頼みとはいえ荷物持ちしてやってるだけありがたいと思え。むしろ敬え。」

智ちゃんが両手に軽々と抱えているのは私のこれからの生活用品。…確かに私じゃ一歩も動けなかつただけどね…。

入学式なのに生活用品しよってるのは自宅から遠い高校ゆえの寮生活の為だ。そして事前準備を現実逃避で避け続け何一つ郵送しなかつた結果でもある。

あれ、敬うべきなのかな？

「智様あ……帰りたい……胃が痛い……」

「はいはいはいはい」

私の意見など歯牙にもかけず腕を掴まれズルズル引きづられていく。

そうですか、私も荷物に入ってるってわけですか。

うとうとう、入口の門が見えてきた。晴れて高校生活が始まるという記念すべき門に相応しく、レンガ作りで鉄柵がはめ込まれた重厚な風格あるつくりをしている。奥に静かに佇む洋館はこれまた年代物のようで、明治時代の洋館風のデザイン。中学の教科書に載っていた鹿鳴館にちよつと似ている。服装規定が厳しいのが納得だ。この雰囲気にはルーズソックスのコギャルが闊歩していたら誰でも髪色もどしスプレーを噴射してルーズソックスをルーズじゃないソックスになるまで引き上げたくなるよ、うん。

普段なら鑑賞に値するところだが、晴れどころか暗雲しか立ちこめていない私の脳内では牢獄の入口にしか見えない。

「…自分で、決めたんだろ？」

ポツリと智ちゃんが呟く。

「…。…うん」

…そう、決めたんだ。

前を向こうって。ちょっとずつでも進んでいこうって。ちゃんと勉強して、…人と、関わって。

怖いけど、イヤだけど。約束したから。

あの子との約束だけは、破りたくないから。

「うん」

キツと前を向いて門に向かって歩き始める。

智ちゃんのフンつと鼻を鳴らす音が背後で聞こえた。

そして、私は駆け出した。

…後ろに。

「やっぱりムリ～～～～！！！！」

明日から、明日から頑張るから！！きつと、いや、多分。いつか。

「とつとと行かんかあ！！！！」

尻込みしまくりました私を智ちゃんは思いっきり一本背負で投げ飛ばし、軽々と入り口を（飛びっ…っというか飛ばされ）越えることが出来ました。ありがとうございます。

うらぎりものおお（最初から味方ではかけらもなかった）！。実家帰ったら覚えてるよ！！シャー芯全部1cm感覚に折ってやるんだからああああ！！！！

第一問：高校生活をはじめなければならない。(1)(後書き)

初めて投稿です。ときどきです。読んで頂いてありがとうございます。
した！！不定期ですが頑張って更新していきたいと思えます。

第二問： 高校生活を始めなければならぬ。(2)

タイミングよく、とでも言うべきか。始業の鐘が鳴り校門は閉じられた。

智ちゃんに荷物ごと投げられた私は、見事に新入生を誘導していた教師の真ん前に顔から着地した。

「
…」

や、やめて。そんな可哀想な子を見る目でみないで！痛む顔面といたたまれない気持ちで起き上がると、ふと、気づいてしまった。

注目されている。

周りの視線が突き刺さる。無数の目が私を見ている。

当たり前だ。あれだけ騒いだのだから。

当たり前だけど、智ちゃんが傍についてくれたので気が大きくなっていたらしい。なんだかんだ言っても心配してくれている智ちゃんはここに来る間私を心配して気にかけてくれた。

その智ちゃんはもう遠い門の外 …

様子がおかしい私に気付いて駆け寄ろうとするけど、重い鉄柵は閉じきっている。

私は一人。

ひとりだ。

ひとりになったら、めだつてはいけない。みんなにきづかれてはいけない。いけないのに、わたしはいまみんなにみられている。みられたら、くちがひらく。くちがひらいたら

…

…あ。だめだ。

「姉貴!!」

徐々に体が小刻みに震えだし、したたかに打った顔面から痛みと血管が脈打つ音を感じる。

先生が怪訝な顔をして覗き込んだ。

「ちよつとあなた、大丈夫？」

伸ばされた手を必死で払い後ずさる。

見ないで、触らないで、笑わないで

「姉貴!しつかりしろ!!!クソっ!!!」

頭を抱え込み髪を掻き掴み何度も首をふる。

こないで、みないで、だれもわたしにさわらないで

とん、と背中になにかが当たる。

「うわっ…とと」

じんわりと熱が伝わる。

あたたかい。

「なんなんだよ…っって！ちょっと！！あんた顔色ひどいぞ！！！」

そうか。私は今ひとに倒れこんでいるのか。

だったら、はやく、にげなきゃ

そう思うも体は動かず、背中の温もりを感じながらわたしは意識が遠くなり

やがて消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2294s/>

私と貴女っていうか貴方、のモンダイ。

2011年10月8日08時00分発行